

## 渡嘉敷島における年中行事とウタキ

— 2004年の調査から —

長谷川 曾乃江\*

Traditional Annual Functions on Tokashiki Island in 2004

Sonoe Hasegawa

2004年に実施した渡嘉敷島の2集落（渡嘉敷及び阿波連）での民俗調査結果を整理し、年中行事（集落全体で行うもの）の実際と聖地（ウタキ及び拝所）の現状を、『渡嘉敷村史』の記述と比較しながらまとめた。

キーワード：渡嘉敷、阿波連、年中行事、ウタキ、拝所。

### 1. 渡嘉敷島調査の目的と方針・方法

#### （1）調査目的

筆者の最大の興味関心は、琉球文化圏<sup>1)</sup>における位牌祭祀慣行が現代までいかに変容しつつ継承されてきたのか、またいかなる地域的なヴァリエーションを生み出してきたのかにある。こうした問題意識を前提としたうえで、慶良間諸島など首里・那覇から近距離の離島で、位牌信仰がどのように受け入れられ、現在どのような形態をとっているかを調査しようと思った。

#### （2）調査方針・方法

位牌祭祀の調査は各家庭のプライバシーとも直結しているため、いきなり開始するのは困難であると思われる。むしろ、年中行事など島の伝統文化が現在どのような形に変化しながら継承されてきているかを調査しながら、その変化の背景にある生活実態の変化や、伝統文化に対する人々の意識を探り、その延長線上で現在の位牌祭祀のあり方を調べる方法が妥当と思われる。そこで、主に集落ごとに行われている年中行事の見学や調査を中心に調査日程を立て、その前後に個別の聞き取り調査を進めていくようにした。

### 2. 2004年に実施した調査

#### （1）調査目的

2004年には予備調査を含め、それぞれ短期間の調査を計5回行った。

2004/3/7～9 予備調査その1

2004/3/18～21 予備調査その2及び彼岸の仏壇飾り見学

2004/4/20～23 浜下り見学を中心に

2004/7/1～5 五月ウマチー見学を中心に

2004/11/8～13 種取り行事見学を中心に

今回の調査報告では紙数の関係上、年中行事（ここでは各家庭や門中だけの行事は含まず、集落全体で行っているもの）とウタキ及び拝所について、『渡嘉敷村史』における記述と現状を比較しながら調査した結果をまとめた。墓制、葬制、門中組織、各家庭での仏事や門中行事（十六日、彼岸、盆、清明祭などを含む）、位牌祭祀のあり方などについては、2005年以降も引き続き調査を行ったうえであらためて報告したい。

### 3. 年中行事の伝統と実際

『渡嘉敷村史・資料編』では伝統的な年中行事が暦

\*中央大学理工学部、連絡先：112-8551 東京都文京区春日1-13-27

順に整理され解説されているが、そのもとになった民俗調査は1970年代終わりから80年代にかけて行われたもので、現在すでに行われなくなった行事もあるため、いま実施されている行事を再確認することが必要と思われた。

渡嘉敷及び阿波連において現在も継続されている区  
の主要行事は表1及び表2の通りである<sup>(2)</sup>。

表1 渡嘉敷区の行事

日 程	行 事 名
新1月3日	生年祝者合同祝賀会
新1月7日	ハチウガン（初御願）
旧2月1日	海神祭
旧3月4日	ハマウリ、ハーリー
旧5月15日	ゲンガチウマチー
旧6月15日	ルクガチウマチー
旧6月25日	大綱引
旧8月10日	八月ウマチー[シバサシ]
旧10月大安	種取行事
新12月20日迄の大安	シーウガン

表2 阿波連区の行事

日 程	行 事 名
旧1月7日	ナンカヌスク
旧1月25日	ハツウガン
旧2月4日	ウミヌウガン
旧2月15日	カーウガン
旧3月3 or 4 日	ハマウリ
旧3月5日	虫バレー
旧4月15日	アブシバレー
旧5月4日	ゲンガチヨッカー
旧5月15日	ゲンガチウマチー
旧6月15日	ルクガチウマチー
旧8月10日	ハチガチウーミ（ウィーミ）
旧9月30日	ミツカウタカビ
旧10月2日	タニトイ
旧11月30日	シーウガン

生年祝（トウシビー） 13歳、25歳、37歳、49歳、61

歳、73歳、85歳の厄落としの祝い。現在は村全体の  
合同行事として村公民館で盛大に行われている。

ハチウガン、ハツウガン（初御願） 『村史』には  
「ハチゲニントウ（初御年頭）」とも書かれている。

正月一日に各家庭の繁栄と健康を祈願するもの。

ナンカヌスク（七日の節句） 『村史』には、各家で  
仏壇に拝んだ後正月飾りを取り払ったとある。現在  
では阿波連のみ。

ウミヌウガン（海の御願） 渡嘉敷では、海神宮に漁  
業関係者や役場関係者などが集まり、海の航海安全  
と大漁を祈願する海神祭として行われる。阿波連で  
は、海沿いの拝所を含む場所で行われる。

カーウガン 阿波連のみで、集落内及びその周辺の重  
要な井戸（カー）で行われる。

ハマウリ、ハーリー（爬竜船競争） 2004年には旧暦3  
月3日（新暦4月21日）に阿波連のハマウリ、4日  
（同22日）に合同ハーリー（渡嘉敷港で）及び渡嘉  
敷のハマウリが実施された。元来は子どもの健康祈  
願などの意味を含めた行事だが、現在では老若男女  
が参加する公認の休日であり、学校も半休となる。  
自然の浜が残っている阿波連区では昔通り無人島に  
小舟で渡っての拝みが行われ、観光客も交えてバー  
ベキューや潮干狩りを楽しむ。一方、フェリー就航  
のために港を埋め立てた渡嘉敷区では、待合所で区  
全体の懇親会（酒宴）が行われる。新暦ではちょう  
ど年度替わりにあたるため、人事異動で新たに赴任  
してきた人たち（青年の家、駐在、郵便局、消防署  
などの職員）の顔見せも兼ねている<sup>(3)</sup>。

虫バレー（虫払い）、アブシバレー（蛙払い） 田畑の  
害虫であるカタツムリ、バッタ、蛇、テントウムシ  
などを捕らえて海に流し、害虫駆除を祈願する行事。  
旧4月15日からルクガチウマチーまでの2ヶ月間は  
ヤマドメ（山留め）（稲の生育を妨げないための禁  
忌）のため、ウタキに登っての祈願やチジン（太鼓）  
などの鳴り物は避ける。渡嘉敷では、ハマウリ前日  
に水田の土を3回掘り起こした後害虫を捕らえ、ハ  
マウリの朝に海に沈めている。

ゲンガチヨッカー（五月四日） 『村史』では「ユッ  
カヌヒー」（四日の日の海の祈願）として、阿波連  
では海の祈願とハーリーを行ったとある。現在でも  
行われている。

ゲンガチ（五月）ウマチー 『村史』には「アラホバ  
ナ（新穂花）の祭り」「五月ウイミー（五月折り目）」  
とある、稲穂の豊穰祈願。2004年阿波連区では、旧  
暦5月15日（新暦7月4日）に拝所2カ所（トンチ

グァー、阿波連神社)で拝みが行われた。稲の生育を願うため、供物には頭付き魚(奇数)、果物、お菓子の他、白米握りも添えられる。ヤマドメのため、オモロは肉声と手拍子のみ。

**ルクグァチ(六月)ウマチー** 五月ウマチーの祈願が叶えられたお礼に、一期作でできた米で赤飯を炊いて供え、豊年、健康、大漁の祈願をする。ヤマアキ(ヤマドメの禁忌解除)のため、ウタキ登りも可能となり、鳴り物も許される。

**大綱引** 現在では渡嘉敷のみ。朝から長さ約200メートルの大綱を作り、東西2組に分かれて勝負する。東(海側)が勝てば豊漁、西(水田側)が勝てば豊作が訪れるとされる。真夏の観光シーズンと重なり、観光客や青年の家利用者なども交えての大イベントとなっている。

**八月ウマチー、シバサシ(柴差)** ススキの葉と桑を各家庭や拝所の要所に飾り、厄払いと祈願を行う。阿波連ではハチグァチウーミ(ウィーミ)と呼ばれている。

**タニトイ(種取り行事)** 『村史』では元来旧暦9月の行事とされているが、現在では渡嘉敷、阿波連とも旧10月に行われている。2004年の種取り行事実施日は、渡嘉敷区が新暦11月9日、阿波連区が同11月13日であり、それぞれ3日前にはミッカウタカビ(三日御崇べ)として、神々を迎える祈願が行われた。渡嘉敷ではミッカウタカビの日は集落内の重要な拝所数カ所<sup>(4)</sup>、祭当日は渡嘉敷神社で、役場、漁協、農協等の昼休みに合わせて祈願した。この祈願は区長がとりおこなう神式に近いものだったが、その後、区内女性たちによる古式ゆかしき拝みも行われた。拝みの中心となったのは、渡嘉敷でのノロの仕事を実質上継承してきた97歳の女性だが、この行事を期に公式行事から引退するというので、参加者にとっては特別な機会になったようである。供物は、揚げ菓子、揚げ物、赤飯握り、おかず、果物、酒。ウコールの脇には稲穂も置かれた。

一方、阿波連でのミッカウタカビは、集落内の拝

所だけでなく、字の発祥や信仰に関わる重要な拝所も含めて全16カ所を廻る丁寧なものであった<sup>(5)</sup>。祭当日は阿波連神社で時間をかけて祈願を行った。供物には、お菓子や果物、お茶の他、小高く盛った白米の上に白握りを一つ乗せたものを作り、その上にバナナの葉をかぶせた。

『村史』には、昔は種取り祭は7日間もかけて行われたとある。その期間、渡嘉敷では伊平屋から神々が来て滞在すると信じられ、祭の最終日には伊平屋に帰る神々を音を立てずに送るため、家の中で静かにしていなければならなかった。特に神々が馬に乗って帰っていく姿はのぞき見てはならないとされたが、古老によると「白装束の人たちがお椀で馬の蹄の音を立てていたようだ」ということである。阿波連区についても同様の記述が『村史』にある。

**シーウガン(末御願)** 年始に行った御願が聞き届けられたお礼と、これまでに願ったことを解く御願(御願解き)。三段重ねの餅が供物に加わる。

#### 4. 重要なウタキと拝所

##### (1) 渡嘉敷の重要なウタキと拝所

『村史資料編』では字渡嘉敷の聖地として40カ所のウタキと集落内の拝所が報告されている。このうちウタキに関しては、ウタキ登りが以前のように定期的に行われなくなり草木が生い茂ったり、ウタキの場所を記憶している高齢者が減少したために、すでに確認が難しいものもある。そこで、現在重要な聖地と見なされているものだけを聞き取りにより整理した。また集落内の拝所に関しては、場所と存在を筆者が確認できたもののみ列挙した<sup>(6)</sup>。

**ニシタキ(西御嶽)** 渡嘉敷島の北にある標高208メートルの西山頂上付近にあり、現在は国立沖縄青年の家の敷地内。字渡嘉敷のどのウタキからも見える場所にあり、最も重要なウタキであった。

**ナカムイガウフシル** 「ナカムイ」とはクミチヂ(久米頂)山のこと。クミチヂ山は村役場の南西300メ

ートルの場所にあり、底辺がほぼ三角形をした標高約37メートルの丘。港側から見れば、集落の最も奥にある小高い山のように見える。渡嘉敷の先祖が最初に平地に住み始めた頃、この周辺に集落を作ったと言われている。そのためか、最も古い拝所やノロを出した家、旧家がこの辺りに集中している。

**シラシダキ（しらせ御嶽）** 渡嘉敷小中学校の西側にある高さ116メートルの白瀬山。

**メータキ（前御嶽）** 役場から真南で高さ204メートルのメーヤマ（前山）の頂上。

**ナカタキ（仲御嶽）** サミカダキの南西に隣接する標高141メートルの山の中腹。

**ナガサチ（長岬御嶽）** 渡嘉敷区中心部から東南方向に約1キロ進んだ、ナガサチ山の頂上。この山の特徴は、東の海に向かって300メートルほど張り出した半島状になっていることと、その先端が東に細長く着きだしていること。

**サミカダキ（さめか御嶽）** 恩納川が海に注ぎ込む河口辺りの、高さ105メートルのサミカ山の中腹。

**海神宮** 『村史』で「船蔵御嶽」と紹介されている拝所は、現在では海神宮と呼ばれている。渡嘉敷小中学校の奥にある。コンクリートで整地された同じ敷地内には、渡嘉敷の最初のノロと言われているハチレーガナシ及びその後継者であるクシレーガナシを祀った拝所もあり、それぞれの子孫とされる家々が中心になって管理している。

**サチリュウグウ** 『村史』で「渡嘉敷大宮の神（カナヒヤグの殿）」とされている拝所に違いはないと思われる場所には、現在も香炉が置かれているが、「サチリュウグウ」と呼ばれている。

**スンドウンチ（ナー）** 『村史』で「慶良間宮の殿（首里殿内ナー）」とされている拝所の番地には、現在コンクリート造りの拝所がある。同じ敷地内の向かって左の方に別の拝所があるが、これは個人の建造物らしい。

**クミムトウ（久米元）** 渡嘉敷神社からも近く、種取

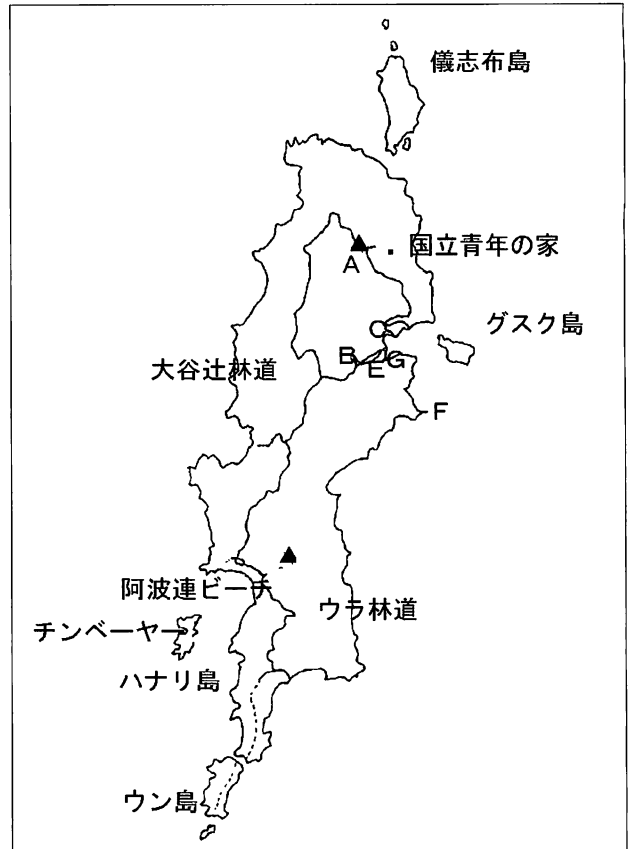


図1 渡嘉敷島の重要なウタキ A：ニシタキ、B：ナカムイガウフシル、C：シラシダキ、D：メータキ、E：ナカタキ、F：ナガサチ、G：サミカダキ。

り祭のミッカウタカビにも使われる重要な拝所。

**渡嘉敷神社** 『村史』によれば、ここは昭和12年に神社鳥居が建てられるまで「トンチグァー（殿内小）」と呼ばれていた。近辺には祝女殿内、前祝女殿内、元祝女殿内、新祝女殿内、シラシダキの主宰者などの旧家がある。現在、渡嘉敷区の主要な行事はほとんどこの神社で行われている。

**アマンザ** 道路から石段を少し上がった空き地に三つの拝所がある（上の殿とヒヌカン、下の殿）。

**ヒジナガストウン（髭長の殿）** 大きなガジュマル、桑の木、紙を作る原料にしたというカビギー（カジの木）に囲まれた拝所。カビギーは村指定天然記念物となっており、アラカキニヤー（新垣仁也）という人物が中国で製紙法を学びカジノキを持ち帰ったという案内板が立っている。

**ウヌルモー** 『村史』には、戦前は渡嘉敷神社の前あたり（渡嘉敷村字渡嘉敷38番地）にさまざまな行事を

行う広場があり、そこをウヌルモー（御祝女毛）と呼んだとあるが、現在「ウヌルモー」と呼ばれている場所は文化財根元家石垣の隣（46番地）である。今も行事には欠かせない重要な拝所であることには変わりはない。

**カヤヌメーグァー** 郵便局と道を隔てて、フクギに囲まれた小さな広場にコンクリートで作られた拝所。『村史』によると、茅葺きのカミアシャギがここに建てられたのが名の由来ではないかとある。

**カヤヌメー** 消防署敷地内の、建物と建物に挟まれた狭い場所にあるコンクリート作りの拝所。

**マカー（真川）ダキ** 集落北西部にある浄水施設の横を通り、道沿いに登ったところにある拝所。

**ウチマシガー** 役場近くのカーブミラーのある場所に井戸があり、現在は蓋がされている。以前は生活水を汲むために使われており、「ムラガー」とも呼ばれていたらしい。

**世の主の墓** 『村史』には「世の主加那志の殿」とある。鬼慶良間（渡嘉敷出身ではないが、渡嘉敷でさまざまな貢献をした人物）の墓。

**ナガジョーヌトゥン（長丈の殿）** 拝所内部にウコールとヒヌカンを確認したが、管理者が那覇在住ということもあり、そこが本当にナガジョーヌトゥンかどうかは未確認。

**学問の神様** イフサチ（渡嘉敷川が港に注ぐ少し手前の、畑沿い）という場所にある、コンクリート製の新しい小さな拝所。薩摩藩から派遣されて琉球に和文をもたらし、渡嘉敷滞在中は島の人に学問を教え「ガクムニューヌシンシー（学問世の先生）」と呼ばれた僧侶を祀る<sup>7)</sup>。

## （2）阿波連の重要なウタキと拝所

阿波連の聖地についても同様に場所の確認が難しくなっているため、2004年の調査で実際に確認できたウタキ及び集落内の拝所だけ取りあげ、整理する<sup>8)</sup>。

**カニマン（金満）ウタキ** カータガーラのさらに奥と

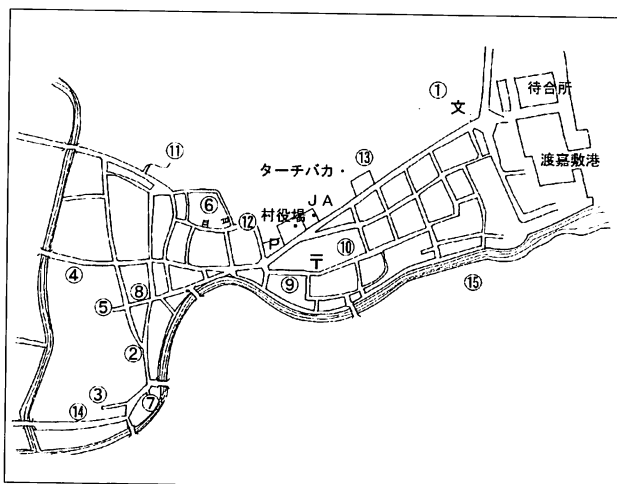


図2 渡嘉敷区集落内の主なウタキと拝所 ①海神宮、②サチリュウグウ、③スンドウチ（ナー）、④クミムトゥ、⑤渡嘉敷神社、⑥アマンザ、⑦ヒジナガストウン、⑧ウヌルモー、⑨カヤヌメーグァー、⑩カヤヌメー、⑪マカーダキ、⑫ウチマシガー、⑬世の主の墓、⑭ナガジョーヌトゥン、⑮学問の神様。

いう場所から推測して、『村史』では「西川上御嶽」として紹介されている場所と思われる。阿波連の先祖の居住地であったと伝えられ、また「東川上御嶽」と並んで阿波連集落の重要な水源だった重要なウタキである。

**チンベヤー（君南風屋）** ハナリ（阿波連ビーチ沖に浮かぶ無人島）にある拝所。琉球王国時代、高級神女チンベヤーが久米島と沖縄島を往復する途中、風向きが変わるのを待つために阿波連の近くに船を停泊させ、この岩屋に滞在した。それを知った阿波連の神女たちが料理など用意してハナリに渡り、チンベヤーをもてなしたのがハマウリの由来になっているという（図1参照）。

**シラバ** 『村史』では「船蔵御嶽」とされている場所（阿波連小学校に隣接する保安林の中）にある拝所は現在ではこう呼ばれている。大きなビジュル石の両脇に小さな石が一つずつと、長方形のウコールが一つ置かれている。

**イビガナシ、イビヌメー（威部の前）** 集落から阿波連漁港に向かう少し手前の、同敷地内にある二つの拝所。入口には鳥居が建てられコンクリートで整地されている。二つとも海の守り神であり、鳥居に近い方がイビヌメー（大きなビジュル石3個、ウコー

ル5個、賽銭箱)、奥にある方がイビガナシ(大きなビジュル石2個に、それぞれウコール1個ずつ)。

**阿波連神社** 阿波連集落の最も奥であり山裾にあたる位置にある。大きな拝所にウコール5つとヒヌカンがあり、さらに奥には神式の小さなお宮があって、扉を開けると神鏡とウコール1つが置かれている。

**トンチグァー(殿内小)** 阿波連集落から渡嘉敷へと続く道路が上っていく脇の拝所。入口近くに大きなガジュマルの木があるのが目印。『村史』には、神社が整備されるまではここが主要な拝所だったとあるが、現在でも多くの行事で利用されている。

**マカー(真川)ウタキ** 字阿波連13番地の民家のすぐ裏側にある崖の上。渡嘉敷に向かう道路のすぐ脇を、草木をかき分けながら入っていくと、半分土に埋もれたウコールが3個ある。昔はこの辺りまで海がせまっていたため、阿波連の先祖はさらに上方に屋敷を建てたという。『村史』で「ウイヌトン(上の殿)」が位置するとされているトゥヌヤマ(殿山)の裾部分に当たると思われる。

**トーバル(桃原)** 『村史』では「桃原の御殿」とされており、現在も、阿波連区の行事祈願の中心となってきた女性の屋敷である。ハツウガンやシーウガンの際に祈願が行われてきた。

**クバンダキ** 展望台の西側すぐ下にある拝所。

**ウマンサン** 『村史』には「ウシアゲモー御嶽」ともある。生活館(字阿波連公民館)敷地内の、入口を入れて右側の植え込み(石があるだけ)。昔、若者たちが力比べや武芸の練習をした場所。かつては2ブロック西側にもモー(野原)があり、そちらを「イリヌモー」、ここを「アガリヌモー」と呼んでいた。

**ヌールン** 教員住宅敷地内にある、小さな屋根付きの拝所。長方形のウコールが1個ある。かつてはここもモーであり、種取り祭の際にカミアシャギが作られた。

**カータガーラ** 集落北西部に広がる畑地を、山の方に入っていく場所。すぐ横に、昭和2年12月建立の祈念碑があるのが目印。この拝所の左上の方にも拝

みを行う場所があるが、わかりにくい。水源に近いので、昔はここまで水を汲みに来たという。

**フル(古)ガー** 阿波連神社の東南にある民宿の裏。現在は蓋がされている。

**ミー(新)ガー** トンチグァーの敷地から道を隔てた東側の井戸。「ムラガー」とも呼ばれ、日常生活にも利用された。現在は蓋がされている。

**ウフサマー** キャンプ場内のコンクリート製の拝所で、「阿龍真之宮」と書いたセメントの柱が立っている。内部にはウコールが5個あるが、真ん中のものは首里の円覚寺に由来するという。

**ウフシル** キャンプ場内の、ウフサマーの南側にある拝所。『村史』調査時には赤瓦屋根だったらしいが現在はトタン屋根がついている。ウコールが上段に3個、下段に2個ある。中国から渡ってきた人が葬られた場所で、死体の体液(シル)が大量に流れたことからこの名がついたという。

**カンヤシチ** 集落の中ほどにある、民宿けらま荘の道を隔てて東隣。同地所内には2つ拝所があるが、そのうち北側のもの(南側は個人のもの)。内部には向かって右側に大きなビジュル石と長方形のウコール2個、左側には石が3個置いてある。『村史』には記述が見あたらなかった。

**シーシャー** 集落東端に作られた、新しいコンクリー

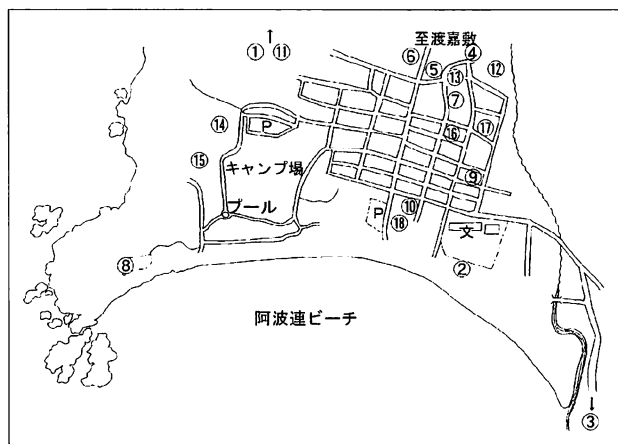


図3 阿波連区集落内及び周辺の主なウタキと拝所 ①カニマンウタキ、②シラバ、③イビガナシ、イビスマー、④阿波連神社、⑤トンチグァー、⑥マカーウタキ、⑦トーバル、⑧クバンダキ、⑨ウマンサン、⑩ヌールン、⑪カータガーラ、⑫フルガー、⑬ミーガー、⑭ウフサマー、⑮ウフシル、⑯カンヤシチ、⑰シーシャー、⑱ナカドゥマイ。

ト製の拝所。かつて行われていた獅子舞の、獅子頭だけが飾られている。ウコールが2個置かれている。村史には記述なし。

**ナカドゥマイ（仲泊）** ペンションサザンクロス敷地内の浜側にある小さな拝所。中央奥の石碑には「仲泊 龍宮神平成八年三月」とあり、その前にビジュル石が3個、長方形のウコールが3個置かれている。ナカドゥマイとは、その昔唐船などが船を一時停泊させた場所（トゥマイ）の、何ヶ所もある中間あたりを指したのではないかということである。『村史』には記述なし。

## 5. 考察—伝統行事の現状と今後

上にも書いた通り、ウタキ登りが行われなくなってウタキの場所が確認しづらくなり、また参加者の高齢化（行事への参加者は主に70代後半以上）に伴って、祈願場所を減らしたり、あるいは車で拝所を廻るなどの変化が近年では見られる。

しかし最も重要な変化は何と言っても後継者の減少であろう。渡嘉敷にはかつて40名ほどの神女組織があり、ノロとその下位の神女（ウチナンシー）から構成される「イチトゥクルガミ（五所神）」が祭祀の中心になっていた。しかし戦後ノロ制度が廃止され、またウタキ信仰も迷信として否定された時期を経て、伝統的な祈願行事が行える人たちは減少した。上述したように、2004年には最後のウチナンシーの一人だった女性が公式行事から引退した。一方、首里系のルーツを持つと言われ、伝統的な形態を比較的残してきたと思われる阿波連でも、2004年11月調査の段階で拝みの中心となる女性が引退を表明している。生活や意識の変化

とも相まって、今後どのようなかたちで伝統行事が引き継がれ実施されていくのかが興味深いところである。

## 謝 辞

調査の際には、渡嘉敷村役場宮平昌治氏、与那嶺絹子渡嘉敷区長、東恩納昇阿波連区長、その他両区の伝統行事を支えておられる高齢のご婦人方をはじめ、渡嘉敷島在住の多くの方々にいろいろご教示頂いた。この場を借りて、深く御礼を申し上げる。

## 注

- (1) ここでは、琉球王国体制下において、首里・那覇の士族文化が波及したと考えられる地域を指す。
- (2) 渡嘉敷、阿波連各区長による。阿波連区の行事については、2002年に実施した行事記録を参照させて頂いた。また、『渡嘉敷村史』の記述については『渡嘉敷村史 資料編』第2章第3節を参照されたい。なお、以下では『村史』と略す。
- (3) 詳細については、長谷川（2004）を参照。
- (4) クミムトゥ、渡嘉敷神社、ウヌルモー、マカーダキ、海神宮。
- (5) 訪れた順に、トンチグァー、フルガー、ミーガー、マカーウタキ、カータガーラ、カニマンウタキ、ウフサメー、ウフシル、ナカドゥマイ、シラバ、イビガナシ及びイビスヌメー、ヌールン、カンヤシチ、ウマンサン、シーシャー、阿波連神社。それぞれのウタキや拝所の詳細については4. (2) を参照せよ。
- (6) 『村史』第2章第2節1を比較参照のこと。
- (7) 詳細は『村史』または『とかしきの民話』198-200頁参照。
- (8) 『村史』第2章第2節2を比較参照のこと。

## 引用文献

- 小嶺園枝, 2004, 「渡嘉敷の伝統」(私的覚書).
- 渡嘉敷村史編集委員会編, 1987, 『渡嘉敷村史資料編』渡嘉敷村.
- 渡嘉敷村史編集委員会編, 1983, 『とかしきの民話』渡嘉敷村: 198-200.
- 長谷川曾乃江, 2004 「渡嘉敷島における2つの『浜下り』についての覚書」, 『人文研紀要』(中央大学人文科学研究所) No.51:279-294.